

7

戦跡視察(被爆地周辺)



親：江波戸景子 子：嘉乃子

長崎への原子爆弾投下から今年は79年。今なお多くの原爆遺跡がそのままの姿で残されています。

私たちは8月8日から3日間、多くの原爆遺跡を巡りました。特に初日から2日間は長崎原爆資料館を起点として、爆心地周辺をじっくり見学することができ、原爆の脅威と凄惨さについて深く考える機会をいただきました。今回見聞きした経験を伝えることで、多くの方に原爆遺構について知って頂けたら幸いです。



平和祈念の像（平和公園）

長崎の原爆の被害は主に「爆風」「熱線」「放射能」によるものでした。特に爆風と熱線の被害は、今なおそのままの姿で残っているものがいくつもあります。それら爆心地付近の遺構について、まとめました。

長崎原爆資料館を出て最初に向かったのは爆心地公園です。その道中に川があり、その壁面には国内外の子供たちによるカラフルな壁画作品が展示されていました。それらはピカソの有名な反戦作品である「ゲルニカ」になぞらえた「平和の祈りキッズゲルニカ in ながさき」という企画展。どの作品もカラフルな色彩で平和な世界を描いた作品です。



「平和の祈りキッズゲルニカ in ながさき」

長崎で学んだこと、感じたこと

爆風で飛ばされた瓦礫に混じって熱線によって変形したガラスや金属の日用品がそのまま埋まった状態で保存されている当時の地層を見学しながら階段を上り、目的地の爆心地公園に到着しました。

私たちが着いたのは8月8日の午後でしたが、喪服や正装姿の外国人の方々が列をなして献花をされていたのが印象的でした。多くの世界中の方々が79年経った今でも原爆の被害に心を痛み、犠牲になった多くの命に哀悼の意を表している光景が目前にあるのに、戦争や紛争によって苦しんでいる人々の悲惨なニュースが日々報道されている、このふたつの現実が同じ世界線上にあるのが不思議な気分でした。キッズゲルニカで子供たちが描いたような平和な未来はやってくるのでしょうか。



爆心地にて献花をする人々

他の戦争遺構も回りました。

爆心地から南東500mほど離れた旧長崎医科大学の門柱は、そのズレと面ごとの表面の違いが当時の爆風の凄さを一言で言い表していると言って過言ではありません。石製の大きな門柱は一方だけが台座からずれて傾き隙間ができた状態のまま保存されています。もう一方は山のかげとなって爆風の影響が少なかったそうで、今も通用門としてそのまま使用されています。



台座と隙間ができた旧長崎医科大学の門柱

それよりさらに爆心地から離れた場所にある山王神社二の鳥居もまた爆風によって一本の柱が倒壊し、もう一本は熱線によって表面の一部剥離をおこしましたが、奇跡的に立ったままの姿を残せました。この鳥居は今も長崎市民の生活に溶け込み、その姿は平和への願いを訴えかけているように見えます。



一本柱で立ち続ける鳥居

これら、市民の日常生活の中に存在する遺構そのものが、原爆の恐ろしさを伝える強いメッセージであると感じました。

宇崎 陽子

2年前の夏休み、我が家は家族で広島の平和記念資料館を訪れました。4年生だった息子にはまだ刺激が強すぎるかもしれないという私の心配をよそに、息子は時間をかけて一つ一つの資料を読み込んでいました。夏の自由研究は「広島原爆」についてまとめ、考察ではその年にロシアとウクライナで始まった戦争を止めるために自分ができることについて考えました。

2年以上経ってもロシアとウクライナの終戦はみえず、世界各地の紛争も増加し、日本を取り巻く情勢は難しさを増しています。そんな情勢での今夏、もう一つの被爆地である長崎で、6年生になった息子とともに平和についてさらに考えを深める機会をいただけたことを大変有り難く思います。

3日間の平和派遣の行程は、どこを取っても深い学びと長崎でしか得ることのできない大変貴重な体験の連続でした。中でも息子にとっては、90歳になる松尾幸子さんの被爆体験講話が強く印象に残ったようです。講話に先立ち長崎市長が「被爆体験者の平均年齢は85歳を超えている。若い人たちがバトンを受け継ぐ時」とメッセージを送られ、息子はバトンの担い手の一人として気持ちを強くしたようでした。

私は、城山小学校の平和祈念式に参列させていただいたことが衝撃ともいえる貴重な経験となりました。爆心地から西方500mに位置する城山小学校は、学校にいた教職員31人のうち28人が亡くなり、児童1,500人のうち1,400人余りが尊い命を落とされました。被爆から6年後、少年平和像の建立をきっかけに全校児童で平和の大切さについて学習する平和祈念式がスタートし、それ以来、毎月途絶えることなく平和祈念式は開催され、私たちが参列させていただいた日は876回目の平和祈念式でした。



長崎市立城山小学校にて

開催数からも一目瞭然ですが、城山小学校の児童にとっては、日常生活の中で平和を考えることが当然のこととしてあり、戦争や原子爆弾について学習発表する児童の言葉からは、自分のこととして平和の大切さを真に捉えている力強さが溢れていました。「イスラエルでは毎日70人の子どもが負傷している。もう止めてください」と大人へ訴えるだけでなく、平和の種を増やすために「友だちと仲良くする」「困っていたら助ける」など、生活の中で自分たちができることについても真剣に考えていました。



城山小学校平和祈念館（被爆校舎）を見学

今回の平和派遣で、城山小学校の児童だけでなく青少年ピースフォーラムで真剣に学び合う全国から集った青少年たちの姿を拝見し、被爆体験者からのバトンはすでにつながれていることを強く感じました。同時に子どもたちが平和の種をより広く、より自由に蒔くことができる土壌を増やしていくことが私たち大人の責務なのだと身にしみ

ました。日常生活の中で子どもたちが少しずつでも平和の種を蒔いていけるよう、考え行動していきたいと思います。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様、一緒に貴重な時間を共有させていただいたメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。

(追記) 城山小学校の校長先生が、イタリアの小学校に続いてロシアの小学校からも千羽鶴が届いたというお話をされていました。ロシアの子どもたちはどのような願いを込めて鶴を折り戦争被爆国の小学校へ届けたのでしょうか。この千羽鶴も平和の種の「一粒」になることを願ってやみません。

宇崎 純平 (愛日小学校6年)

ぼくは、4年生の夏に家族で広島の平和記念資料館を訪れ、原爆の恐ろしさを初めて知りました。

今回、長崎の平和派遣に参加して、日本人のぼくたちが原爆の恐ろしさを世界へ伝えて平和の大切さを発信していかななくてはならないと改めて感じました。平和派遣で体験した中で特に印象に残ったことを2つ報告します。



1つ目は、1日目の青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話です。

90歳の松尾幸子さんが当時11歳で体験したことを話してくれました。松尾さんの家は農家で大家族でしたが、原爆で兄2人、姉2人、兄嫁、叔母2人、父の8人が亡くなりました。松尾さんは、原爆が落ちてきた時の光や音がすごかったこと、やけどで皮ふがヌルヌルになって亡くなった姉のこと、熱い灰の上を歩いたことなどを話してくれました。「姉たちが死んだことより

自分の置かれている状況の方が恐かった。ぶるぶる震えて眠れなかった」という松尾さんの言葉を聞いて、ぼくも体が震えるような感じがしました。被爆体験講話は、実際に体験した方から直接話を聞くことができるとても貴重な機会で、多くのことを考えさせられました。

2つ目は、8月9日の平和祈念式典に参列したことです。式典は、被爆者の家族や地域の代表者、国の重要責任者など、全国でも極わずかな人しか参列できないので、自分がそこに参列していること自体、不思議な感じがしました。式典では、被爆者の方や岸田総理大臣など国・県・市の責任者が哀悼の意をささげ、長崎市長が平和への誓いを宣言しました。

ぼくは、これから先ずっと、長崎の平和祈念式典をテレビで見るたびに自分が参列した2024年の暑かった夏を思い出して平和について考え続けていくと思います。

今でも、被爆者の方々は原爆によって心に深い傷を負い、薬を飲み続けて不安を抱えながら生活され



永井隆博士が過ごした如己堂にて

ています。今、被爆者の方々の平和への願いをぼくたちが受け止めて発信していかななくてはならないと強く思います。



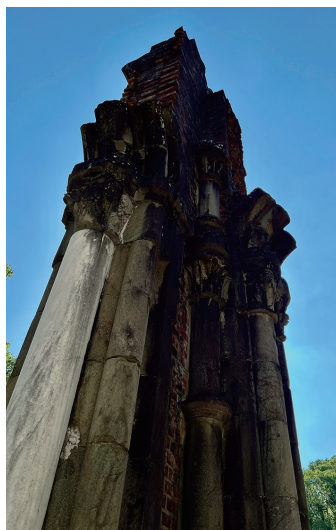
江波戸 景子

娘から平和派遣の参加者募集の案内を渡され「行ってみよう」と言われたことが、今回参加するきっかけでした。我が家は娘のほかに兄二人いる五人家族で、なかなか娘と二人で過ごす時間が取れない環境で、平和事業への関心よりも「親子で長崎に行ける」という期待感での発言だったのだと思います。

そんな不純な動機でよいものかとの思いを抱えたまま初回の顔合わせに参加したのですが、同じ参加者の子どもに自ら話しかけにいたりして、積極的に関わろうとする姿勢に少し安心して派遣の日を迎えました。

当日。

前日の雷雨の影響で多少遅れはしたものの予定通り長崎の地に降り立つことができ、午後からは一部の大人と職員の方と一緒に、予定通り爆心地付近の視察へ。



移築された浦上天主堂壁の一部

「わずか」79年前の出来事なのか「もう」79年前の出来事なのか。そのとらえ方ひとつで、観る視点が大きく変わる気がします。

展示中のキッズゲルニカやたくさんの方の慰霊碑などに混じって今なおそのままでの姿で残されている戦争遺跡とのコントラストに、とても感慨深いものがありました。



被爆遺構巡りの様子（式典前日の平和公園にて）

翌日参加させて頂いた城山小学校の平和祈念式及び5年生の学習発表でも、原爆投下で何が起きたのか、これからどうしていくことが大事なのか、しっかり自分ごととして捉えている姿に感動しました。



長崎市立城山小学校にて

また、市長による平和祈念式典でのスピーチも、いかに核兵器による牽制が危ういものか、人類がどのように平和を維持していくべきなのかを熱く語られており、モニター越しではあったもののひどく心を揺さぶられました。このように長崎の方々が原爆投下からの時間を「わずか」と思っているからこそ、長崎からの平和への訴えが強く胸に響くのだと思いました。

3日目の自由時間には、グラバー園や眼鏡橋などの観光を娘と二人で楽しんだのですが、キリス

ト教が迫害されながらもその信仰を止めなかった長崎の隠れキリシタンの歴史などが長崎の平和への訴えにも大きく影響しているのを感じ、より興味深く拝見できました。



長崎の街や建物を視察

今回、活動中は娘と共にいることは少なかったのですが、娘は自身で当日知り合ったメンバーと趣味等の共通点を見つけてうまく話題を作り、楽しく青少年ピースフォーラムに参加できていたようです。知らない人ともきっかけを作って仲良くしていくという体験が、今後、娘が身近にできる平和への取り組みに繋がっていくのかもしれない。

このような素晴らしい体験を与えてくださった区や参加したメンバーの皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

江波戸 嘉乃子 (落合第一小学校6年)

私は平和派遣に参加するまで、原爆のことについて学校で少し触れたほどなのであまり知らなかったし、特に何も感じていませんでした。しかし、今回の平和派遣に参加して、原爆について見方がかなり変わりました。今まではただすごい威力なんだと思っていただけで被爆者のことなど考えたこともなかったけど、平和派遣に参加して原爆の恐ろしさを改めて知ったし、被爆者にどんなことがあったかなど原爆についての知識が増えました。

また、初日の青少年ピースフォーラムで聞いた被爆体験講話で、被爆者の生活と私の生活があまりにも違いすぎてびっくりしました。

今私は学校に行って色々なことを学べるし、家族も友達もいるし、外に出て遊ぶこともできます。でも被爆体験講話をしてくださった松尾さんの生活は、空襲があるから外に出ることは制限されるし、学校で空襲があった時に備える方法を学ぶ時間があったり、お兄さんやお父さんは出兵したりと、今の私の生活からは想像できないものでした。



青少年ピースフォーラムを終えて全国の参加者と

この3日間で派遣団の子達と共通の話題や趣味でだんだんしゃべる時間が長くなり、仲良くなることができました。そのことから私は、どの国の人でも共通の趣味や話題で仲良くなることができるのではないかと考えました。

そして私は平和派遣で学んだ原爆のこと、被爆者がどれだけつらかったかなどを心に刻み、これからも家族や友達、今の生活を大事にしていきたいし、どんな国の人とでも偏見を持たず仲良くしたいです。



尾園 智彦

平和派遣に参加して考えさせられたことは二点ある。一点目は、「平和はフヘンテキである」ということ。そして二点目は、「平和はフヘンテキではない」ということ。決して言葉遊びをしているわけではないが、それぞれ伝えたいことは以下のとおりである。

平和はフヘンテキである

人間にとって平和は普遍的な価値であり、誰もが願っているということである。核兵器について、その存在を断固として認めない核廃絶派もいれば、核を保有することによる抑止力が平和につながるという核容認派もいる。真向から対立する意見だが、どちらも平和を実現したいという根底の部分は共通している。

核保有国と非核国との間の溝がなかなか埋まらないのは、核保有国が決して核戦争を肯定しているのではなく、核兵器と共存することによる平和を目指しているからだろう。青少年ピースフォーラム二日目のグループ討議の様子を見学していても、争いや困りごとを平和的に解決したいという想いは共通しているにもかかわらず、提案したアクションが真逆の方向になり合意形成に難儀しているケースが散見された。平和とは誰にとっても普遍的な価値であるゆえに、その実現に向けた行動が対立したときの調整は困難を極めるのだと感じた。

平和はフヘンテキではない

平和の定義は不変的ではない、つまり平和が意味することは時間とともに変化することである。九州出身の私は、まさに息子と同じ小学6年生の夏に修学旅行で長崎を訪れ、平和公園や長崎原爆資料館を巡った経験があるのだが、今回2回目の訪問では新鮮な気持ちで平和につ

いて考えることができた。それはきっと、「平和」が意味することの大枠の部分は時間を経ても不変的だが、学生の立場で考える「平和」と、大人になって、さらには親になって考える「平和」は視点や重点が異なるからだろう。このように、個人のライフステージに合わせて平和の意味合いが変化するだけでなく、その時々の世界情勢や社会環境によっても、平和を達成するための優先課題は変わってくるのかもしれない。だからこそ、平和学習は常にアップデートが必要なものであり、生涯を通じて向き合っていかなければならない課題だと認識した。



長崎原爆資料館の見学

多くの自治体が児童のみを対象とした平和派遣事業を実施している中、新宿区が「親と子の平和派遣」としているのは、親にとっても生涯学習として大きな意義があり、大変感謝している。



長崎市立城山小学校の平和祈念式見学

尾園 浩太
(富久小学校6年)

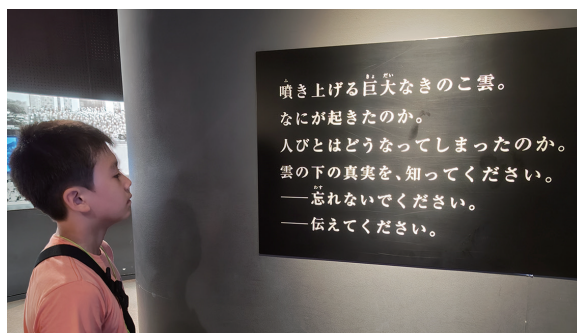
ぼくはこの平和派遣に参加して、心に残ったことが三つあります。

一つ目は、青少年ピースフォーラム一日目の被爆者（松尾幸子さん）のお話です。特に印象に残ったのは、松尾さんは空襲から逃れるために事前に山へ避難していて、爆弾投下後に町からたくさんの人がひどいやけどを負って山に上がってきて、その人たちの中に自分のお父さんがいたのに、お父さんだとわからなかったぐらいの酷いやけどだったということです。



青少年ピースフォーラムのワークショップ

二つ目は、長崎原爆資料館です。長崎原爆資料館には、原子爆弾の熱線で背中がえぐれるほどの大やけどを負った人の写真や、原子爆弾の熱で溶けてくっついてしまったガラス瓶などがあり、それが今でも目に焼き付いています。ぼくが長崎原爆資料館で一番驚いたのは長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の大きさでした。高さはぼくの二倍くらいありました。



長崎原爆資料館の見学

三つ目は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典です。式典では、長崎市長の鈴木史朗さん、被爆者代表の三瀬清一郎さんなどがお話をされていました。特に印象に残ったのは、鈴木市長の「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。この言葉には、もう二度とこのような出来事を起こしてはならない、核爆弾を使わない、作らない、核廃絶の世界を作るという意味が込められていると感じました。

ぼくは平和派遣を通して、平和についての考えがより一層深まりました。この経験が無駄にせず、「今のぼくたちの平和な生活は、戦争を経験した人たちの犠牲の上に成り立っているのだ」ということを考えながら生活しようと思います。



武田 義博

今回の平和派遣に参加したことで、私は亡き母、私、そして10歳の娘という三世代の視点を通して、戦争と平和について深く考える機会を得ました。母は広島で黒い雨に遭い、その被爆の悲しみを背負いながら生きてきました。その経験は私の人生に大きな影響を与え、今回の平和派遣を通じて、その思いを娘にも伝えることができました。

平和派遣の初日、被爆者の体験談を聞き、戦争の疑似体験を行った後、平和祈念館や原爆落下地点を訪れました。その時、日向灘で発生した地震警報がスマホから一斉に鳴り響き、まるで戦時中の空襲警報を思い起こさせるような緊張感が走りました。瞬時に、戦時中に家族を守ろうとした親たちの恐怖と必死の思いはどれほどのものだったのか、想像を絶するものがあったことでしょう。その後、ホテルに戻った際、娘がドアに小指を挟んで怪我をした時、私は動揺してしまい、どうすればよいか迷い右往左往してしまいました。そんな私の姿を見て、戦時中の親たちが、何もできずに苦しんだ無念さとは比べものにならないものの、親として無力感に打たれました。

青少年ピースフォーラムの中で、戦争疑似体験で配られたカードには、家族や食べ物、学校といった「大切なもの」を書き、戦争が進むにつれてそれらが次々と失われ、最後にはすべてが消え去るという体験を通じて、娘は自分の日常がどれだけ大切であるかを改めて感じたようでした。長崎原爆資料館では、悲惨な写真や映像の前にかつての家族の生活や笑顔があったことを想像し、平凡な日常こそが平和の一步であると改めて感じました。

城山小学校で行われた平和祈念式では、娘と同じ学年の小学生たちが一体感を持って発表する姿に心を打たれました。特に「平和は城山から」という誓いは、平和への強い意志を感じさせるもの

で、小学校の高台から見た長崎の悲劇から復興の風景には、多くの魂が息づいていると感じ、忘れることができません。

長崎の青少年ピースフォーラムでは、未来を担う若者たちが生き生きと活動する姿が印象的で、娘もその一部となり、平和への思いを育てていることを誇らしく感じました。この平和派遣中、イスラエルがガザの学校に攻撃を加え、多くの子供たちが犠牲になるという悲劇がありました。そのニュースを聞いた時、福田須磨子さんの詩が頭をよぎりました。「原爆を作る人々よ、今こそためらうことなく手の中にある一切を放棄するのだ。」この詩は、祈念式典の平和宣言にも引用され、平和のために立ち上がる強い決意を感じました。

新宿区の平和派遣では、親子一緒に現地で学び、共に考える素晴らしさを実感しました。式典後、ホテルで娘と一緒に祈念式典のテレビニュースを観ながら共感し、彼女が目をは輝かせて説明する姿に、若い世代が平和の意識を引き継いでくれることを頼もしく思いました。

長崎での経験を通じて、母が一生懸命に生き、私を育ててくれたことへの感謝を心の中で伝えられた気がします。そして、日々を大切に生きることこそが、平和への一步であると教えられました。娘が青少年ピースフォーラムで勇気を出して発言する成長した姿、他の子供たちと無邪気に交流する微笑ましい姿を見ながら、これからの厳しい世の中を強く生き抜き、平和が続くようにと願いました。そしてふと、母もまた、私が生まれた頃からずっと同じ願いを抱き続けていたのだろうと、長崎の地で感じました。母から私へ、そして私から娘へと受け継がれていくその願いが、長崎の空の下で深く繋がった瞬間でした。



武田 菜々 (江戸川小学校 5 年)

平和派遣に参加する前に、お父さんから初めて、自分が原爆被爆者の三世だと教えられて、とても驚きました。学校やニュースで少し戦争のことは知っていましたが、亡くなったおばあちゃんが原爆にあったことを知り、戦争についてもっと学びたいと思いました。

最初に、青少年ピースフォーラムに参加しました。全国からたくさんの人が集まっていて、ちょっと緊張したけど、他の参加者と一緒に平和について学ぶことができました。次に、被爆者の松尾幸子さんのお話を聞きました。松尾さんは、B29 の爆撃が怖くて学校にも行けなくなり、私と同じ小学校 5 年生の時に原爆で家族や街が一瞬でなくなってしまったそうです。学校に行くことがあたり前ではないことを知って、悲しい気持ちになりました。松尾さんは、「小さな声でも核に反対だと言ってほしい」と言っていたので、私も何かできることがあればやりたいと思いました。



フィールドワークでは、被爆の傷あとを、暑い中、青少年ピースボランティアの人が説明してくれました。戦争の疑似体験では、大切な人や物が次々と失われるのを体験し、原爆がすべてを消してしまう怖さを感じました。避難訓練では、爆弾のおそろしい力を感じることができました。

また、城山小学校の平和祈念式では、私と同じ 5 年生の子が平和について一生懸命発表しているのを聞いて、とても感動しました。毎月祈念式を続けていることも、すごいと思いました。

平和学習のグループ別意見交換では、私が一番年下だったのでドキドキしましたが、「暴力ではなく、話し合いで解決すべき」という私の平和宣言を発表しました。青少年ピースボランティアのお姉さんがやさしく助けてくれて、とても嬉しかったです。



青少年ピースボランティアと

長崎原爆資料館では、全身がまっ黒に焼け焦げた人々の写真を見て、原爆の破壊力と恐ろしさを感じました。平和祈念式典では、黙祷の中で平和の鐘の音が鳴り響き、平和宣言の後、鳩が一斉に飛び立ったのが心に深く残りました。



この 3 日間で、平和がどれだけ大切かをしっかり学びました。これからは、家族や友達や世界の人に原爆の怖さを伝えて、毎日を大切に生きていきたいと思います。

塚本 京子

戦後 79 年の時を経て、戦争体験の継承が課題となっています。母方の曾祖父が、1945（昭和 20）年の東京大空襲で行方知れずになったことを、孫である私に語ってくれた祖母も数年前鬼籍に入り、現在中学生になる我が子に、自身の戦争体験を語れる親族は、おりません。戦争体験の継承が、私たち親世代の役割であると認識しつつも、具体的に何をしたら良いのか答えが見えない中、新宿区の平和派遣事業に参加させていただきました。

長崎で過ごした 3 日間は、現地でしか感じえない、多くの学びを得る機会となりました。数多くの経験の中でも、平和祈念式典当日の朝、爆心地から 500m の距離に位置する、城山小学校の平和祈念式に参加させていただいた事は、とりわけ深く心に残りました。式次第を拝見すると、第 876 回と記載されているのです。この回数に大きな驚きを覚えながら確認すると、城山小学校では、原爆が投下された 8 月 9 日だけではなく、1951（昭和 26）年以降、毎月 9 日に平和祈念式を行い、被爆死された方のご冥福を祈るとともに、子どもたちが平和について学び、発信を続けていってほしいとの事でした。

式典中、子どもたちの合唱を聞きながら、原爆で亡くなられた方にも、歌声が届いているように感じられ、「日本は、あの戦争が終わってから 79 年間ずっと平和でしたよ」と、戦災死された方々に、心の中で語りかけながら、涙を流している自分がいました。

長崎原爆資料館で目にすることができる、被爆の惨状を伝える数々の展示品や、城山小学校の被爆校舎など、物言わぬ遺品や遺構も、原爆の脅威について、私に多くのことを伝えてくれました。しかし、単にそれらを目にするだけでは「原爆は怖いね」「今は平和で良かったね」という、表面的な感想を持つところで、認識がとどまってしまったのではないかと、ということに思い至りました。

では城山小学校で、思わず涙があふれてしまうほど、深く心が揺さぶられたのは、どうしてだったのかと考えた時、「核を無くしたい」「戦争は、もう二度としたくない」という、強い思いを込めて、直接語りかけて下さる方々に出会えたことが、大きかったのではないかと気づかされたのです。

第 876 回平和祈念式



日時：令和 6 年 8 月 9 日（金）
第 1 部 第 876 回平和祈念式
8 時 35 分～ 9 時 25 分
第 2 部 原爆殉難者慰霊会
9 時 40 分～ 10 時 20 分
第 3 部 城山小学校平和祈念館見学
会館時間 8 時 30 分～ 17 時 30 分

城山小学校慰霊会
長崎市立城山小学校

長崎でお世話になったのは、ご自身の被爆体験を語って下さった松尾さんだけではなく、青少年ピースフォーラムの運営を担当されたボランティアの皆さんや、城山小学校で式典の中心を担って下さったのは、平成生まれの若者たちです。

長崎を訪れる前に感じていた問の答えが、次第に見えてきました。戦争を知らない世代であっても、戦争がもたらす惨禍は、それを伝えたいという思いを強く持つ人がいる限り、途絶えることなく継承することができる、という事です。

本年、被爆 79 周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典には、現在紛争状態にあるイスラエルとパレスチナの若者たちが、NPO 法人の働きかけで来日して共に式典に参列し、その後、交流を深めたとの報道に触れました（『朝日新聞』2024 年 8 月 26 日付夕刊）。「あなたを自分のきょうだいのように感じる」との言葉が、若者から寄せられたとの記事に、大きな希望を感じるとともに、人と人との交流なしには、平和の実現が困難であることを実感させられます。

「戦争はしない」「絶対にさせない」という思いを胸に強く持ち、自分が出れることは何か、模索しながら、地道に行動を続けていきたいと考えています。

塚本 暢子 (三輪田学園中学校 2 年)

私は平和派遣の活動で、印象に残ったことがあります。

一つ目は、長崎原爆資料館を見学したことです。原爆資料館には、原爆が投下された午前 11 時 2 分の時刻を指したまま、時が止まってしまった振り子時計など、家庭で使われていた日用品のほかに、爆風で鉄骨がゆがんだ中学校の給水タンク、分厚いコンクリートの壁が一瞬にして破壊されたという事務所ビルのらせん階段など、大型の原爆遺構も展示されていました。

このような数々の展示物の中でも、私が印象に残ったものは、高熱で変形してしまったガラス瓶です。展示されているガラス瓶は、複数の瓶が溶けて合わさり、一つのかたまりになっていました。ガラスは普通、日常的に変形するものではありません。ですから原爆の熱線が、どれだけ高温であったのか、その恐ろしさが伝わってくるようで、とても驚き印象に残りました。

二つ目は、青少年ピースフォーラムで、戦時下の疑似体験ワークに取り組んだことです。疑似体験のワークでは、まず複数の付箋に、大切な人・物・場所を書きました。最初はたくさんあった付箋が、空襲や徴兵制などによって、段々減っていくと、そのたびに少し悲しい気持ちになりました。

しかし、被爆者の方は、私のように紙に書いた付箋を手放したわけではなく、実際に大切な人・物・場所を、いっぺんに失ったのかと思うと、より一層悲しい気持ちになりました。



大切なものを書いた付箋を渡す
(疑似体験ワーク)

三つ目は、同じく青少年ピースフォーラムで、核兵器の現状を知るワークに取り組んだことです。このワークでは、まず広島・長崎の原爆を BB 弾に見立てて、落下させました。次に、現在地球上にある核兵器を、同様に BB 弾に見立てて、落下させました。すると、広島・長崎と比べものにならない程の落下音がし、落下時間も倍以上かかりました。このワークを通じて、広島や長崎に投下された原爆よりも、さらに上回る威力を持つ核兵器が、まだ地球上にたくさんあるという事実、驚かされました。



ウクライナとロシアなど、今なお戦争を続けている国があります。実際に長崎に出かけ、79 年前に起こった原爆の被害を見て、日本以外の国も戦争がなくなり、世界が平和になれば良いと、強く感じるようになりました。

来年は学校行事で、広島を訪れる予定です。今回、長崎で学んだことを思い出しながら、平和のために何が出来るのか、もう一つの被爆地である広島でも、考えてみたいと思います。



中村 崇

私は長崎で空を見ていました。

市街地の上空 500 m で爆発したと言われている原爆。長崎の街の中で空を見上げ、それがどこで爆発したのかを考えていました。



今回、平和派遣で長崎に行く私の目的の一つは、現地に行き原爆についての臨場感を感じ取ることでした。現場に行かないと分からないことはたくさんあります。原爆について、私は教科書や本の文字または映像などからしか情報を得てきませんでした。活字やスマホの動画からは臨場感は得られません。

私は現地に行き、長崎の街の景色、空気、風、湿度、山や坂などの地形、川や海など自然環境を五感で感じようと思いました。



その中で、79 年前の長崎の夏で実際どういうことが起きたのかを感じ取ろうと考えていました。不謹慎ではなく真剣に、どのようにこの街の上空で原爆が爆発したのかを想像しました。人、街、自然が、太陽と同等の熱に呑み込まれていく状況を想像しました。

長崎では、やはり現地に行かないと得られない経験を多くしました。その中で私が一番記憶に残ったことは、城山小学校平和祈念館を訪問した際に見た「ふりそでの少女」という絵です（書籍「ふりそでの少女」に収録、著者：松添博さん）。原爆により亡くなった2人の少女が、死化粧され鮮やかな振り袖を着て、がれきの火で茶毘（だび）されている様子を描いたものです。



「ふりそでの少女」

これを見た感想は筆舌しがたいです。ただ悲しすぎて涙が出ました。

消去法で選ばれた長崎に機械的に投下された原爆。楽しかっただろう人々の夏の時間は、一瞬で地獄になりました。あの街の路地で遊んでいた無垢の子供たちは、突然、上空に化学反応でできた巨大な火の玉に呑み込まれ、亡くなっていったこと。あのとき、突然、日常の生活と幸せを奪われた市井の人たちがいたこと。さらに、罪のない人たちの幸せを奪うだけでなく惨殺した原爆。原爆は新技術の実験という位置づけでもあったと言われています。投下された爆弾にファットマンやラリトルボーイなど一見かわいらしい名前を付けカモフラージュしても、原爆は単なる殺人兵器です。二度と原爆を使わないで欲しいです。

派遣後、私は身体で記憶した長崎の原爆の臨場感を語り継ごうと思いました。次世代の子供たちのために行動したいと思いました。ひとつ成果として、今回の派遣で娘とのきずなが強くなったのかなと考えています。

原爆と戦争のことを娘と一緒に考えることが出来ました。次世代に語り継ぐ、という役目を少し果たせたのかなと感じています。破壊された長崎の街では、原爆投下の10日後に草木が生えてきたそうです。自然の強さも改めて感じました。自然と子どもたちに人類の未来は託されています。



中村 智沙 (牛込仲之小学校6年)

私は初めて長崎に行きました。むかし長崎に原爆が落ちたことを知り、戦争と核兵器がない平和な世界にしないといけないと思いました。

はじめに被爆者の松尾幸子さんから戦争中のお話を聞きました。自分以外の家族は亡くなり、すごく辛かったそうです。そこで、戦争はやってはいけないことだと分かりました。その後、長崎原爆資料館に行きました。そこでは、全身火傷をした子供や男性なのか女性なのか分からない人達の写真などがかざってありました。そのときの写真が怖くて、今でもすごく恐ろしいです。普通の人や子供を殺してしまう戦争は、やはりしてはいけないことだととても強く思いました。



原爆落下中心地に残る被爆当時の地層

今回、私が1番印象に残ったことは、松尾幸子さんの話です。自分は生きていて他の家族が亡くなるのはとても悲しいことです。また、熱線を浴びてしまい重い病気にかかってしまったそうです。熱線を浴びてしまうと治らない病気になるそうで、今でもすごく心配だそうです。

松尾さんは今年で90歳なので段々と身体が弱ってしまいみんなに被爆の話が出来なくなってしまいます。だから、次の世代の私たちがこの戦争の話を語り継がないといけないと、松尾さんはお話の中で言っていました。これは松尾さんからの伝言だと思いました。私は松尾さんの話をこれからもずっと覚えておきたいと思いました。



「My 平和宣言」(青少年ピースフォーラム最終日)

この平和派遣は私にとって良い学習の機会になりました。松尾さんの被爆のお話から、私たちが戦争の話を語り継いでいきたいと思います。世界の平和を願い、みなさんにも戦争について知ってもらいたいと思いました。



平和への思いを込めて描いた絵

福嶋 久美子



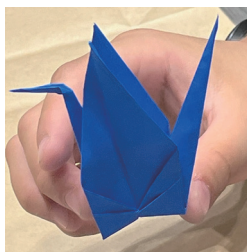
長崎市立城山小学校にて

小学校五年生の息子と参加させていただいた今回の平和派遣。我が子は戦争のことも原爆のことも知っていますが、実際に現地を訪れたとき、どのように感じるのか、考え方に変化や成長があるのかなどに期待していました。

本を読み映像を見ることで学ぶことは大切ですが、実地を自分の目で見て、自分の耳でお話を聞き、自分の頭で考えて話すことに勝るものはないと改めて実感しています。今回、我が子は平和祈念式典に出席し、青少年ピースフォーラムでは講話を聞き、ワークに参加しました。また、被爆現場や資料館を巡るなどして、平和や戦争の惨劇について考える機会をいただきました。

被害を知れば知るほど、戦争の理不尽さや残酷さに重苦しく辛い気持ちになりますが、同時に平和への願いも強くなっていきます。我が子もそのように感じたのだと思います。真剣な面持ちで派遣活動に参加し、意見を述べていました。

そのときの本人の気持ちは何よりの財産です。平和や他者への気持ち。世界と私たち一人ひとり



平和への願いを込めて

が存続していくことは、当たり前のようにあって、当たり前のことではありません。皆が幸せに生きていくためには、当事者たる私たちが行動し、発信していかなければなりません。息子とともに、私もそのことを深く胸に刻みました。

現在の日本は平和と安全で快適な生活を当然のこととして享受していますが、それは、戦争の被害を乗り越えて我が国を復興、発展させてくださった方々の苦勞と努力によるものです。我が子とともに被爆現場などを回るとともに、長崎のきれいな景色や街並みを見て、改めてそう実感しました。そして、平和を守り続ける意義を考えました。

子どもたちに過去の事実としての歴史を教え、平和の尊さを伝えていくのは私たち親世代の責任です。これは、平和派遣に参加させていただいた者としての決意でもあります。ただ、今も世界各地で紛争が絶えません。紛争には様々な要因があるのですが、本来被害を受ける理由のない人の命や生活が危機にさらされている状況は、変えていかなければなりません。

親子それぞれに、感じることや学ぶことが数多くありました。感じ、学ぶだけではなく、自分の中でしっかりと受け止めて咀嚼し、今後の行動につなげていく必要があります。

平和派遣での経験を一時のものに終わらせず、世界の平和を実現するために活かしていくことができるよう、我が子も私も世界平和に向き合っていきます。豊かな社会を後の世代に引き継ぎたい。それは私たち家族の願いです。



福嶋 映貴 (筑波大学附属小学校5年)

なぜ、原爆投下といった悲惨なことが起きてしまったのか、現地を訪れ、改めて辛くて胸が苦しい気持ちになりました。一方で、戦後七十九年を経た長崎の素敵な街並みを見ることもできました。戦争の理不尽さと、先人の苦労や努力。多くを学ぶ派遣活動でした。

羽田空港を出発したときと今では、平和の尊さや大切さへの理解が変わったように思います。講話を聞き、参加者たちと意見を交わし、被爆現場や資料館を訪れることで、ぼくの平和への思いは高まっていきました。

青少年ピースフォーラムのワークでは、空襲、徴兵制、原爆などで、自分の思いとは関係なく、家族や友だち、家などがすぐに失われてしまうことを学びました。恐ろしくなり、もし現実に自分がこうなったらと思いました。これは実際に起きたこと。身近で当たり前と思っていたものは当たり前ではないことを実感しました。被爆の爪痕が残る教会、神社や長崎原爆資料館などにも時間が許す限り回りました。こんなにも被害があったのだということは衝撃でした。今回感じた核兵器や戦争に対する怒りの気持ちはぼくの中で消えることはありません。悲しい過去を忘れず、未来を守るのはぼくたち。未来を創り、前進させていきます。

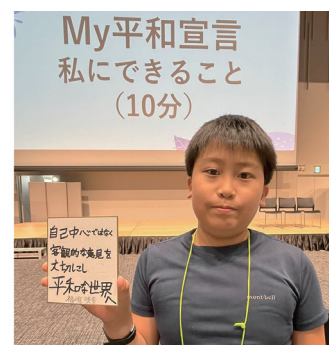


平和祈念式典も強く心に残っています。特に、長崎の鈴木市長の「一人ひとりとは微力であっても、無力ではありません。」という言葉は印象的でした。

一人ひとりが力を出せば大きな結果につながるということだと理解しましたが、一人ひとりが力を出さなければ平和を守るのが難しくなるということでもあるでしょう。ぼくも地球の一市民です。まずは自分のできることとして日々の生活をしっかり送り、そして、医師になるという小さな頃からの夢を実現できるよう、取り組んでいきたいと考えています。医師を目指すのは、世界中の困っている人を助けたいと思うからです。夢を追うことができるのも、平和のおかげです。



今も世界各地で紛争がなくなりません。核兵器も存在しています。被爆国である日本は、悲惨な体験を風化させることなく後世に伝えていかなければなりません。そのために行動する一人として、ぼくは歴史を学び、未来を見据え、自分の一歩が世界平和の一歩につながるよう進んでいきたいと決意しました。



「My 平和宣言」(青少年ピースフォーラム最終日)

令和6年度 平和派遣報告会・平和祈念コンサート (新宿区平和派遣の会・新宿区共催)

日時：令和6年10月20日（日）

場所：戸塚地域センター 7階多目的ホール

第1部 平和派遣報告会

8月8日から10日にかけて長崎への平和派遣に参加した派遣者が、長崎で学んだことを発表しました。

発表のスライドには、子どもたちが報告会のために、平和への願いを込めて描いた絵を入れ、工夫を凝らした内容になりました。

親子発表の後には、クイズコーナーがあり、会場一体となった報告会となりました。また、子ども達による詩の朗読・平和へのメッセージを通じて、平和の尊さを広く訴えかけました。



派遣者代表挨拶：武田 義博さん

【発表内容】

1 被爆の実相

子どもたちが長崎の被爆について説明しました。

2 親子発表

長崎で学んだことを写真を使って発表しました

3 クイズコーナー

来場者に親子発表に関するクイズを出しました。

4 詩の朗読

「原爆を作る人々に」

作：福田須磨子（長崎の詩人）

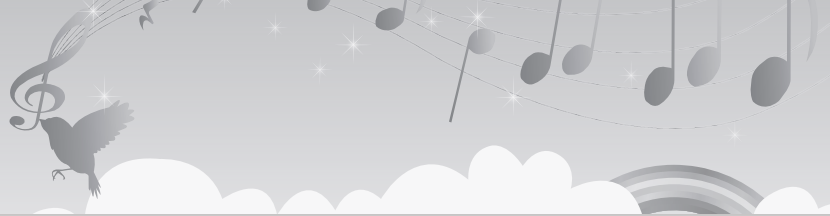
子どもたちが朗読しました。



親子によるクイズコーナー



子どもたちによる詩の朗読



5 平和へのメッセージ

子どもたち一人一人が未来に向けて平和へのメッセージを発表しました。

鳩の絵は子どもたちが平和への想いを込めて描いたものです。



宇崎 純平

被爆者の方々の平和への願いをぼくたちが発信していきます



江波戸 嘉乃子

ぶきを捨てて、みんなが助け合えるような世界へ



尾園 浩太

核兵器で国を守るという考えをなくしたい



武田 菜々

核兵器の恐ろしさを世界の人々に発信します



塚本 暢子

原爆の悲惨さをみんなに伝え、戦争がおこらないようにしたいです



中村 智沙

長崎を最後の被爆地へ



福嶋 映貴

平和や幸せ 守るは僕ら 未来を作る 皆と一緒に

第2部 平和祈念コンサート

早稲田少年少女合唱団による平和への思いを込めた合唱、ピアノ演奏が行われました。

【合唱プログラム】

早稲田少年少女合唱団

指揮：小松晴子

ピアノ伴奏：中村智恵里

♪君をのせて

♪となりのトトロ

♪ともだちはいいもんだ

♪ COSMOS



【ピアノ演奏と女声2重唱】

ピアノ：中村智恵里

唱：上口郁子、河野沙南

♪瑠璃色の地球



【全員合唱】

派遣者の皆さんと一緒に合唱しました。

♪翼をください





令和6年度親と子の平和派遣派遣者・新宿区平和派遣の会



早稲田少年少女合唱団



平和派遣報告会・平和祈念コンサート出演者の皆さん

被爆79周年

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

令和6年(2024年)8月9日 長崎市平和公園

開 式

原爆死没者名奉安 遺族代表、被爆者代表、
長崎市長

式 辞 長崎市議会議長

献 水 遺族代表、被爆者代表、
小・中・高校生各代表献 花 遺族代表、被爆者代表、
長崎市長 他来賓等

黙とう

長崎平和宣言 長崎市長

平和への誓い 被爆者代表

児童合唱「あの子」 山里小学校6年生

来賓挨拶 内閣総理大臣、
国際連合事務総長、
長崎県知事

合唱「千羽鶴」 純心女子高等学校の生徒

閉 式

長 崎 平 和 宣 言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め 眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った 原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家 財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から起ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ“原子病”の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは 23 歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から 79 年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！
今こそ ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて 真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと想いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに陰しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年5月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとりでは微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024年（令和6年）8月9日

長崎市長 鈴木 史 朗

平和への誓い

11時2分、止まったままの柱時計を見るたびに79年前の悪夢がよぎります。

当時10歳の私は、夏休み中で、午前中に警報が解除され、母と祖母は洗濯と炊事を始めていました。私は家にあったオルガンで、B29の爆音を真似して、ブーンブーンブーンと音を出して遊んでいました。それを聞いていた祖母が飛んできて「敵機が来たと間違われるから止めなさい。」と叱られ、渋々オルガンの蓋を閉めて立ち上がろうとした時、ピカッと眩しい閃光が走りました。とっさに学校で教わった通り、指で両耳・両目を押さえ、オルガンの前に伏せました。次の瞬間、爆風が家の中を吹き抜けるのが解りました。その間、恐怖に怯えながらじっと堪えていました。やがて静かになったので、恐る恐る頭を上げて辺りを見廻すと、^{さんたん}惨憺たる有様で、太陽が落ちてきたと思いあ然としてみると、洗濯していた母が狂ったように子供たちを捜し始めました。我が家は8人家族、幸いにも全員無傷でした。

数日かけて家の中を片付け、当時通っていた伊良林国民学校の事が気になり、友人と様子を見に行きました。目に入ったのは、「水を下さい、水を飲ませて下さい。」と弱り切った声で懇願している、男女の区別もつかないほど血だらけの人や上半身裸で傷を負った人でした。体育館に運び込まれた人たちは、誰かが手当てをしたり水を飲ませたりすることもなく、ただ寝かされているだけで、体育館の中は夏の暑さと漂う異臭で地獄のような状態でした。先程まで苦しさにわめいていた人が急に静かになったと思ったら、既に息絶えており、大人が頭と足を抱えて校庭に運び出し、穴を掘り、板の上に遺体を載せて焼いていきました。自分の学校が死体処理場になった光景は、今でも忘れることができません。

あれから79年、私たち被爆者は健康不安に怯えながら、核廃絶を訴えて来ました。しかしながら、海外に目を向けると、ウクライナやパレスチナなど戦火は収まるばかりか泥沼化しており、多くの子供たちが命を落としています。この悲しい現実を目の当たりにして、戦争の愚かさから目をそらすことは出来ません。平和の尊さを痛感する毎日です。

現在地球上には推定12,120発の核弾頭が存在すると言われており、世界においては核兵器の使用が示唆されるなど、一触即発の緊張が続いています。万一使用されるとこの地球がとんでもない状態になる可能性さえあります。本日も列席の岸田内閣総理大臣へ申し上げます。子供や孫たちが安心して過ごせる青い地球を遺していくために、被爆国日本こそが、核廃絶を世界中の最重要課題として、真摯に向き合うことを願ってやみません。

私は、2015年から長崎平和推進協会の語り部として、長崎を訪れる修学旅行生や次世代を担う若者たちに核兵器の恐怖を語り続けており、2023年から英語による活動も始めました。平和とは何かを皆さんと一緒に考え、可能な限り続けてまいりる所存です。最後に“peace is a world heritage shared by all humankind (平和は人類共有の世界遺産である)”と申し上げ、亡き御霊へ捧げる平和への誓いの言葉といたします。

2024年（令和6年）8月9日

被爆者代表 三 瀬 清一郎

印刷物登録番号
2024-6-2301

2024 平和 親と子の長崎レポート

令和 6 年度版

令和 7 年 3 月発行

編集・発行

新宿区総務部総務課総務係

東京都新宿区歌舞伎町 1-4-1

電話：03-3209-1111 F A X：03-3209-9947

区ホームページ：<https://www.city.shinjuku.lg.jp/>

この印刷物は、事業委託により 900 冊印刷しています。

その経費として、1 冊あたり 365 円（税抜き）かかっています。ただし、編集時の職員人件費や配送費などは含んでいません。

無断複写・転載を禁じます。



すべての国の核兵器廃絶と世界の恒久平和を願って